

公益財団法人 国家基本問題研究所
総合安全保障プロジェクト

中国軍事動向月報

2024年6月



JINF

Japan Institute
for National Fundamentals

目 次

1 全 般	・ ・ ・ 3
2 各軍等	・ ・ ・ 4
3 対台湾動向	・ ・ ・ 8
4 対日動向	・ ・ ・ 10
5 国境地域等での活動	・ ・ ・ 18
6 軍事外交	・ ・ ・ 21
参考文献	・ ・ ・ 22

1 全般

3月下旬以降、各教育隊で訓練を受けていた2024年上半期入隊の隊員が新隊員教育を終了し、部隊に配置された。部隊においては、着上陸訓練・機動訓練等の規模が拡大しており、訓練最盛期に向けて演練を積み重ねている段階である。

ストックホルム国際平和研究所（SIPRI）が保有核弾頭数の推計値を発表、中国の核弾頭総数は昨年より90発増加し500発、内24発が初めて配備と評価された。

対外行動に関しては、中国海警船が南シナ海セカンドトーマス礁でフィリピン（以下、比）船舶に対して臨検を実施し、その際比軍人が負傷する等、対応を強硬化させている。

日本に対しては、6月上番の尖閣巡航編隊4隻すべてを砲搭載船（これまでは1隻のみ砲搭載船）とし領海侵入を実施する等、エスカレーションラダーを上げた。また、UAVの奄美大島沖飛行が確認される等、情報収集も活発化させている。

2 各軍等

(1) 陸軍

○ 着上陸訓練

6月21日、東部戦区 SNS は第73 集団軍某旅団水陸両用分隊の着上陸訓練状況を報道。数十両の水陸両用装甲車が揚陸艦との協同訓練、海上からの射撃訓練等の状況が報道された¹。

報道写真から、訓練が実施されたのは台湾対岸の東山島着上陸訓練場の可能性がある。



【コメント】

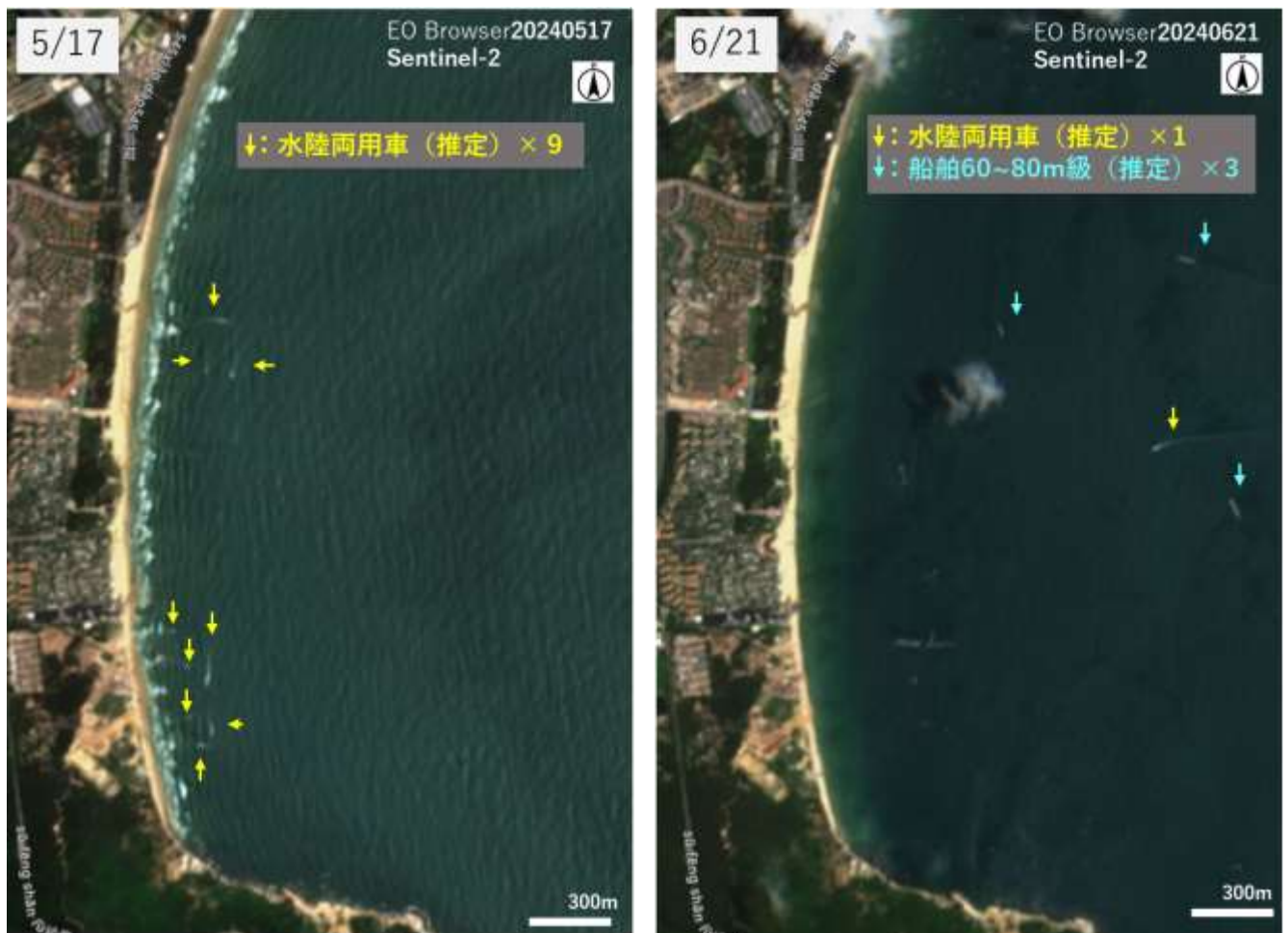
東部戦区第73集団軍は隷下に2コ水陸両用旅団を有し、台湾侵攻時に海岸堡設定の為に最初に投入される台湾侵攻主作戦担当集団軍である。

下は、東山島着上陸訓練場の衛星画像である。

5月は水陸両用車（推定）が1コ小隊規模3両で浮航訓練しており、これが3コ小隊確認されることから、中隊単位の浮航操縦訓練を実施していた可能性がある。

6月には、種別は不明だが船舶と浮航している水陸両用車（推定）が同一地域に確認されることから、報道にあるように船舶を利用した訓練を実施している可能性がある。

水陸両用部隊が訓練を着実に積み上げて練度を向上させている可能性がある。



(2) 海軍

○ Jin 級 SSBN の台湾海峡浮航

6月18日早朝、台湾漁民が台湾海峡中間線付近で浮航する中国の潜水艦を目撃。台湾の顧立雄国防相は「同潜水艦は一貫して中間線西側を浮航しており、19日朝既に中国方向へ航行した」と述べた²。

【コメント】

潜水艦は、写真から Jin 級原子力弾道ミサイル潜水艦（中国側呼称 094 型）と推定される。

同艦は下図のように、亜龍海軍基地に配備されているが、整備のため建造された渤海造船廠集团有限公司に移動する際、台湾海峡を通過している可能性がある。

今回浮航したのは、故障・浅瀬の地形や米軍から回避・台湾への威嚇等報道されている。6月19日は中国海軍潜水艦部隊創設 70 周年であったものの、潜水艦が浮上しては威嚇や士気高揚にならないため、台湾への威嚇目的よりも、浅瀬等、技術的な問題の可能性が考えられる。



(3) ロケット軍

○ 核弾頭数

ストックホルム国際平和研究所（SIPRI）は6月17日、世界各国が保有する核弾頭数の推計値を年次報告書で発表した³。

中国関連部分を纏めたのが下表である。

比較のために、変化あった数値のみ昨年分を下線を引いて付記した。赤字が昨年より増加、青字が減少である。

核弾頭総数は昨年より90発増加し500発、内24発を初めて配備と評価された。これについて、「中国は警報即発射（LOW）能力を向上させており、各弾頭配備を開始、1コミサイル旅団及び弾道ミサイル潜水艦にフル搭載分約24発の可能性がある」と述べている。

また、DF-21A/Eをより射程の長いDF-26に、DF-31を移動型のDF-31A/AGに換装し、長射程化・残存化を図っている可能性がある。

種類	発射体数	配備年	射程(km)	弾頭数×出力	弾頭数
航空機	20				20
H-6K	10	2009	3100	1X爆弾	10
H-6N	10	2020	3100	1XALBM	10
H-20	-	(2030)			-
地上配備ミサイル	350				318 → 346
DF-5A	6	1981	12000	1X4-5Mt	6
DF-5B	12	2015	13000	5X200-300kt	60
DF-5C	--	(2024)	13000	1X多弾頭-Mt	--
DF-21A/E	--	2000/2016	>2100	1X200-300kt	24 → -
DF-26	216	2016	>3000	1X200-300kt	54 → 108
DF-27	-	(2026)	5000-8000	--	-
DF-31	--	2006	7200	1X200-300kt	6 → --
DF-31A/AG	88	2007/2018	11200	1X200-300kt	60 → 88
DF-41（移動型）	28	2020	12000	3X200-300kt	84
DF-41（サイロ型）	--	(2025)	12000	(最大3X200-300kt)	--
潜水艦発射弾道ミサイル	6/27				72
JL-2	-	2016	>7000	1X200-300kt	-
JL-3	72	2022	>10000	(多弾頭)	72
その他貯蔵弾頭					(62)
計	442				410 内、配備 0 → 500 内、配備24

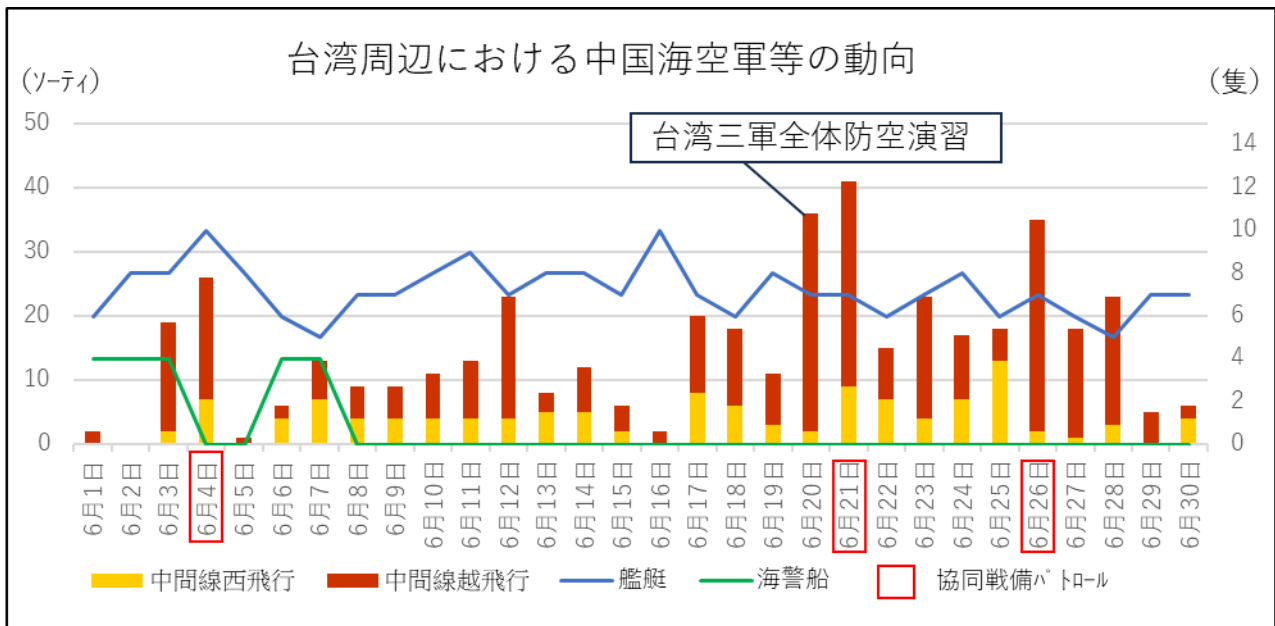
凡例： - : 不明、--: 0か殆どない、() : 不確実

(資料源: SIPRI Yearbook 2024)

3 対台湾動向

(1) 台湾周辺での軍の活動状況

中華民国国防部発表による台湾周辺での中国海空軍の動向を纏めたのが以下の表である。



(資料源：中華民国国防部 HP を基に作成)

6月は中国軍機延べ446ソーター(内、中間線超えが延べ325)、中国艦艇延べ216隻が確認。

1日における軍用機最大確認数は41ソーター、最大中間線超え34ソーター、海空協同戦備パトロールは3回であった。

【コメント】

5月の聯合利剣演習以降、海警船の展開が確認されていたが、6月8日以降は0隻となった。台湾周辺に展開していた海警船は直属第2支隊所属であるが、当支隊の海警船4隻は6月7日以降、直属第1支隊と交代して尖閣編隊へ上番している。

第2支隊が尖閣編隊上番のため台湾周辺海域への展開を一時中止したのであれば、来月第1支隊が尖閣編隊に上番以降再び台湾周辺に展開する可能性がある。一方、聯合利剣演習が終了したため尖閣編隊の運用と関係なく展開を終了したのであれば、来月以降も台湾周辺への海警船の展開は実施されないであろう。海警船の戦力配分の観点から、7月の尖閣編隊の交代後の展開の有無に注目する。

(2) 金門周辺海域での動向

○ 中国海警船の法執行パトロール

台湾海巡署によると、6月1～14日の間、中国海警船4隻が金門制限水域外で活動。6月25日には4隻が金門制限水域内に約2時間侵入した⁴。

同侵入に関し、中国海警局は「6月25日、福建海警が金門付近海域で常態化法執行パトロールを実施した」と公表した⁵。

○ 中国民間会社無人機によるビラ投下

金門島防衛指揮部は、「6月8日、中国の某民間会社が無人機を操作し、金門島にビラを投下した。軍施設・装備は全て偽装を実施しており、無人機対処規定により適切に対処した。」と公表。

飛行の映像は中国のSNSに投稿され、投下されたビラは、端午節を機に台湾へ統一を呼びかける内容であった。ビラ投下は9日も実施された⁶。

無人機を飛行させたのは福建中利科技公司であり、社長の盧増浩は「ビラ投下の影響は大きく、台湾が中国中央に申し入れを行った。会社側は中国当局と話し合い、SNSから映像を削除した」と述べた⁷。



中国 SNS で公開されている金門島上空でのビラ投下の状況 (資料源：自由時報網 20240609)

【コメント】

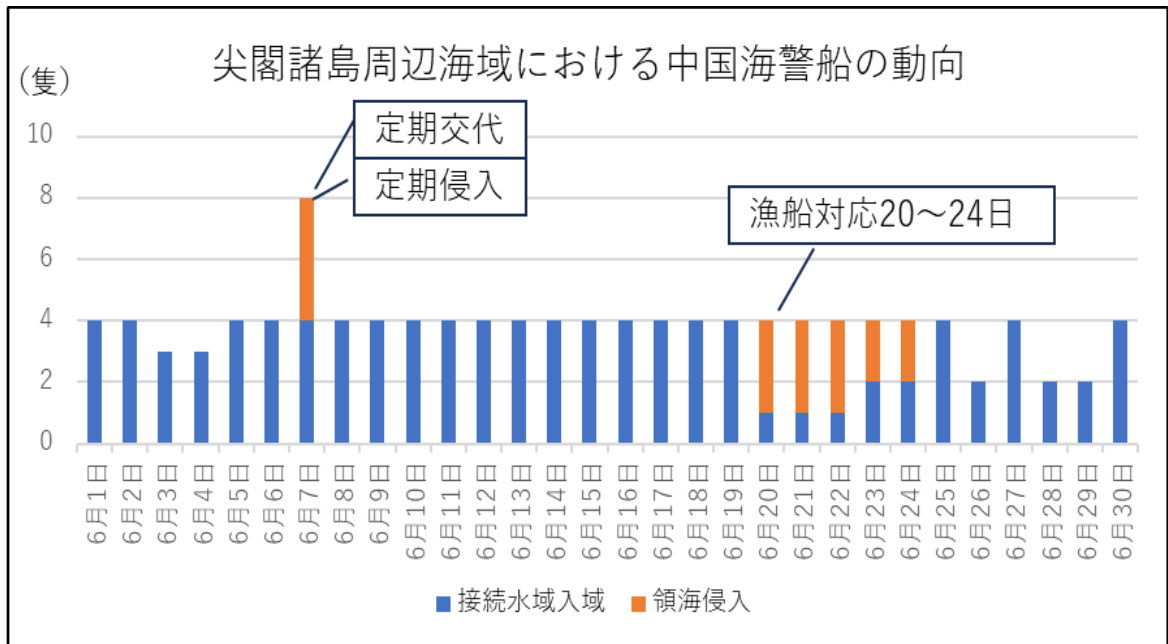
海警船4隻による金門周辺での常駐化及び月1回2時間の侵入は、海警局が尖閣周辺海域で採っている手法と同様であり、今後この状態を継続する可能性がある。

また、ビラ投下と当局の関係は不明であるが、金門島への民間無人機の飛来はこれまでも確認されており、台湾軍も監視を強化し、「適切に対処」したと述べているものの、無人機による撮影やビラ投下を完全に阻止するのは困難であり、今後も発生する可能性がある。

4 対日動向

(1) 尖閣諸島周辺での活動状況

海上保安庁発表等による尖閣周辺における中国海警船の動向を纏めたのが以下の表である。



(資料源：海上保安庁 HP、八重山日報を基に作成)

6月7日、尖閣巡航編隊が交代、これまで編隊は通常4隻で、うち1隻が砲搭載船であったが、7日から初めて4隻すべてが砲搭載船となり、同日、同4隻で定例の領海侵入を実施した。

これについて中国海警局報道官は、「6月7日、中国海警2501編隊が釣魚島（筆者注：ママ）領海内で権益維持パトロールを実施した。これは国家主権・安全・海洋権益を擁護するための定期的な行動であり、地域の平和と安定を擁護し、日本の最近の一連の負の行動に対する必要な措置である。日本が言動を慎み、反省し、挑発を止めるよう忠告する。中国海警は法に基づき、管轄海域内の法執行パトロールを強化し、断固として一切の侵犯・挑発を打ち砕く」と表明した⁸。

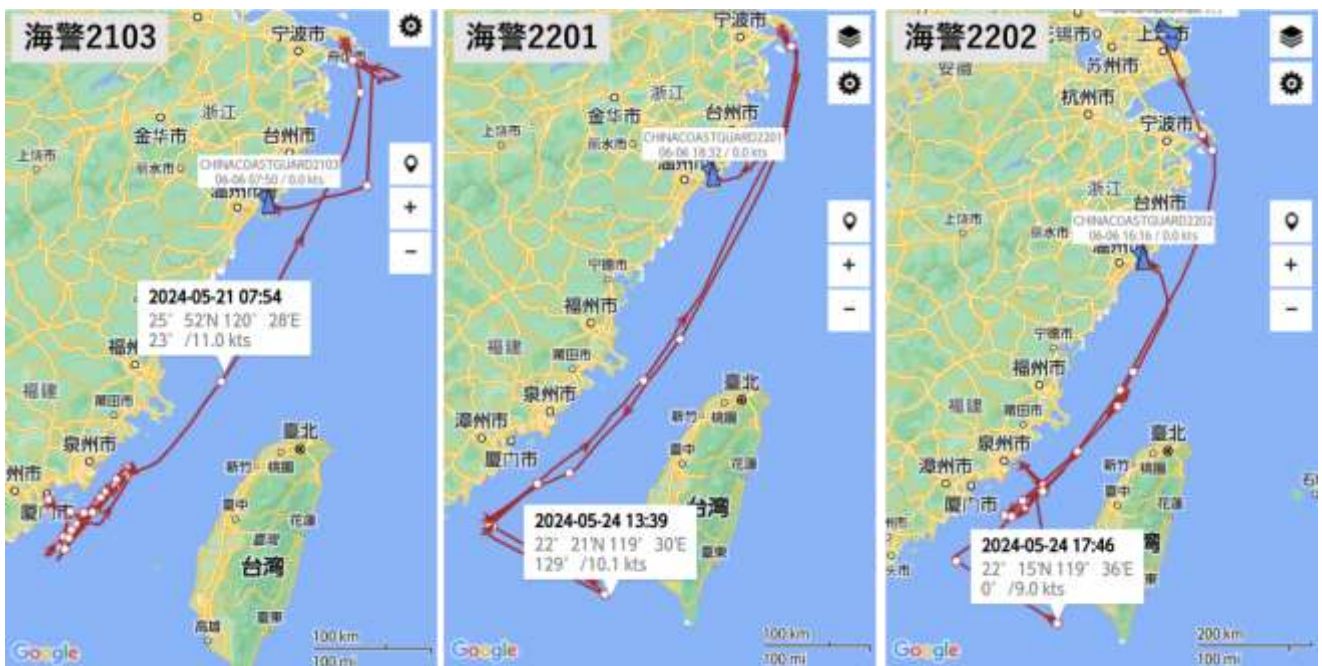
また、6月20日以降の領海侵入については、中国海警局報道官は「6月20～24日の間、“恵比寿”“鶴丸”号等日本漁船4隻と数隻の巡視船の不法侵入」への対応と述べた⁹。

【コメント】

6月7日、尖閣編隊を全て砲搭載船で編成、定期侵入した。中国としては、日本が4月に国会議員等を乗船させた調査船による調査を行った際、海警船2隻に対し海保巡視船14隻以上で対応したことから、短期的には海保巡視船への対応の為、長期的には日本側が次のステップに進むのを牽制するためにエスカレーションラダーを1つ上げた可能性がある。

一方、尖閣編隊は2023年以降、基本的に月初めの1日に上番4隻と下番4隻が交代する一か月ローテーションを組んでいるが、6月は交代日は7日であった。

下図は、今回の編隊のうち、3隻の5月下旬から6月6日までのAIS航跡である。海警2103は金門周辺海域で5月20日まで、海警2201・2202は台湾高雄周辺海域で5月24日まで活動し、尖閣編隊に上番する前日の6月6日までに温州近郊の楽青湾に集結している状況が確認できる。



(資料源：Find Ship から検索)

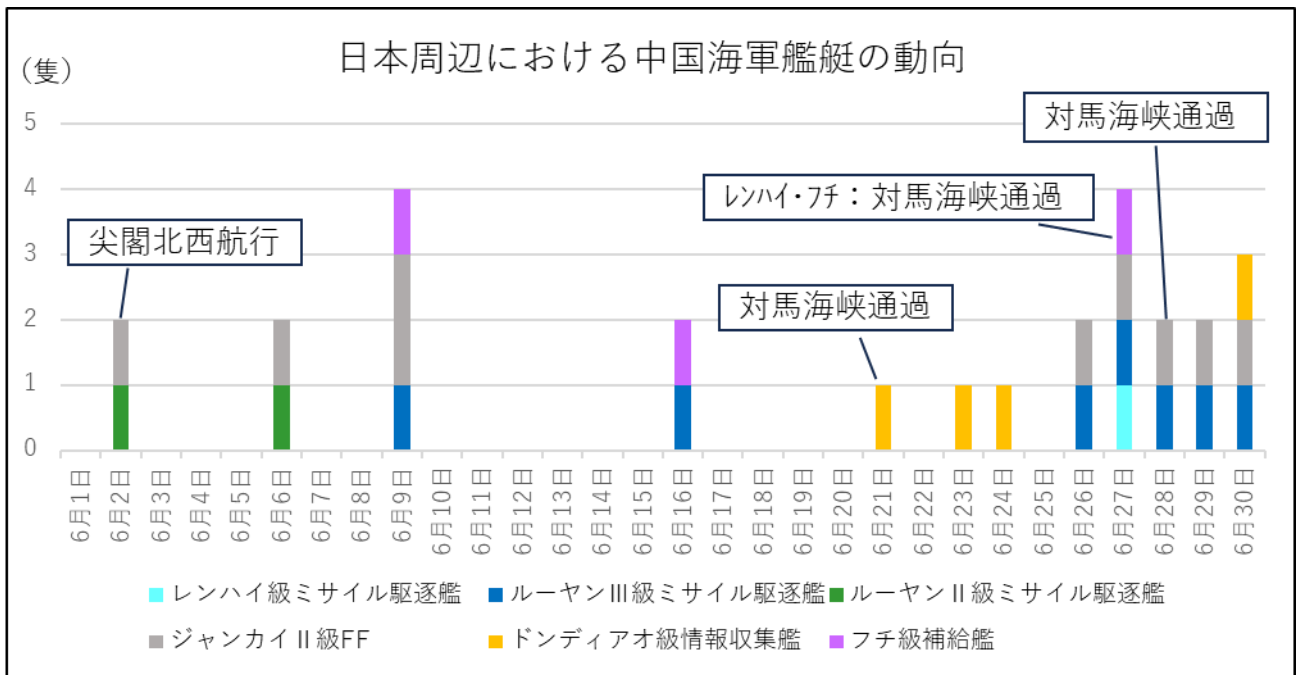
今回編隊を構成する直属第2支隊が5/23~24の聯合利剣演習と並行して法執行演習を実施しており、既述した3隻も参加していたため、演習後の整備等により交代時期を後ろ倒しにした可能性がある。今後の台湾と尖閣周辺海域での海警船の戦力配分は要注目である。

なお、指揮艦である海警2501は聯合利剣に関連するAIS航跡確認できなかったが、6月4日には楽青湾に移動していることが確認できた。4隻とも楽青湾集結時のAISとの発信を統制していないことから、中国は、日本が6月上番の尖閣編隊は4隻とも砲搭載船と認識できるのを承知したうえで、日本の反応を見つつ、日本が対応をとることも勘案して交代当日に領海侵入した可能性もある。

(2) 日本周辺での軍の活動状況

ア 海軍艦艇の動向

防衛省統合幕僚監部発表による日本周辺における中国海軍の動向を纏めたのが以下の表である。



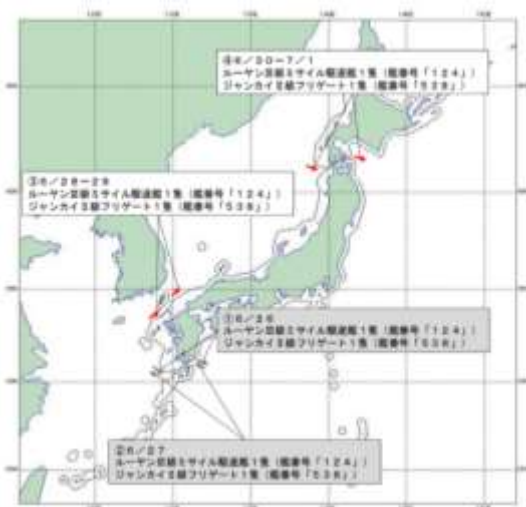
(資料源：統合幕僚監部 HP を基に作成)

【コメント】

6月は延べ26隻と、5月の8隻から大幅に増加した。訓練が徐々に活発化していく時期でもあるが、対馬海峡を通過し、日本海に入った艦艇が5隻確認されており、日米韓共同訓練「フリーダム・エッジ」に対する情報収集の可能性もある。

日本、米国及び韓国は、6月27～29日、初めてとなる複数領域における日米韓共同訓練「フリーダム・エッジ」を洋上で実施し、弾道ミサイル対処訓練、防空戦闘訓練、対潜戦訓練、搜索救難訓練、海上阻止訓練、サイバー攻撃対処訓練を実施した¹⁰。22日には演習に参加した米空母「セオドア・ルーズベルト」が釜山作戦基地に入港している。

中国は日米韓の協力強化に警戒感を示しており、共同演習への情報収集を実施した可能性がある。



6月25日～7月1日にかけて日本周辺で確認されたルンペンIIIとジャンカイIIの航跡

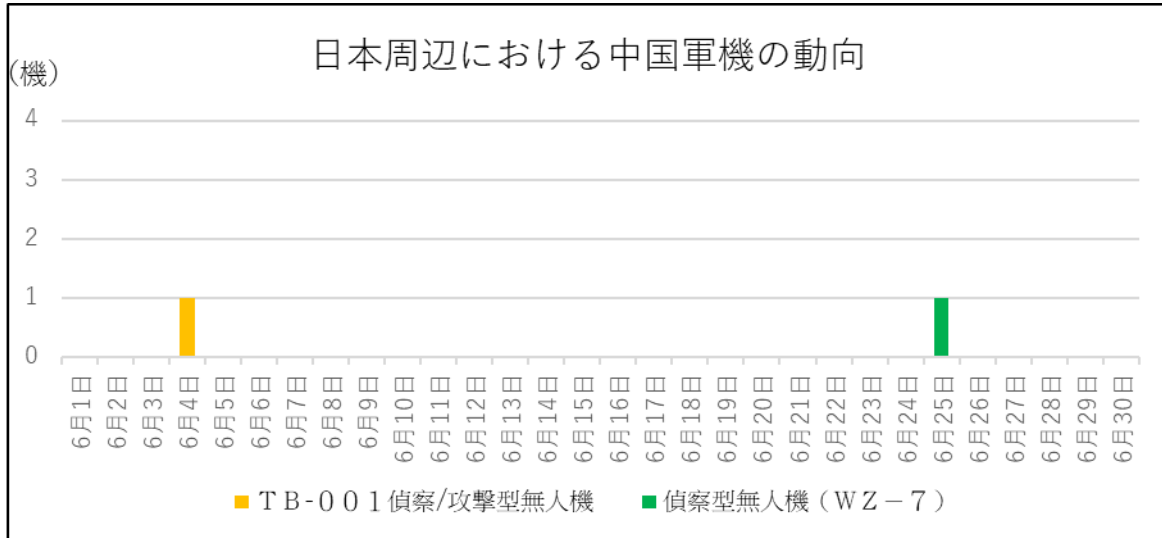
(資料源：統合幕僚監部 HP20240701)

イ 中国軍機の動向

防衛省統合幕僚監部発表による日本周辺における中国軍機の動向を纏めたのが以下の表である。

6月は5月と同様無人機のみ飛来であったが、機数が5月の1機より増加した。

また、その飛行ルートが特異であったため、それぞれの飛行につき、次頁以降に述べる。



(資料源：統合幕僚監部 HP を基に作成)

○ TB-001 の飛来

6月4日午前から午後にかけて、中国軍の偵察/攻撃型無人機（TB-001）1機が東シナ海方面から飛来し、沖縄本島と宮古島との間を通過して太平洋に至り、沖縄本島の南の太平洋上を奄美大島沖まで飛行した後、反転し、再び沖縄本島と宮古島との間を通過し、東シナ海に至った¹¹。



(資料源：統合幕僚監部 HP20240604)

【コメント】

TB-001 は中国では双尾蝮と呼ばれる中高度長時間滞在型（MALE）偵察/無人型無人機で、改良型はTB-001A。製造メーカーによる諸元は以下の通り¹²

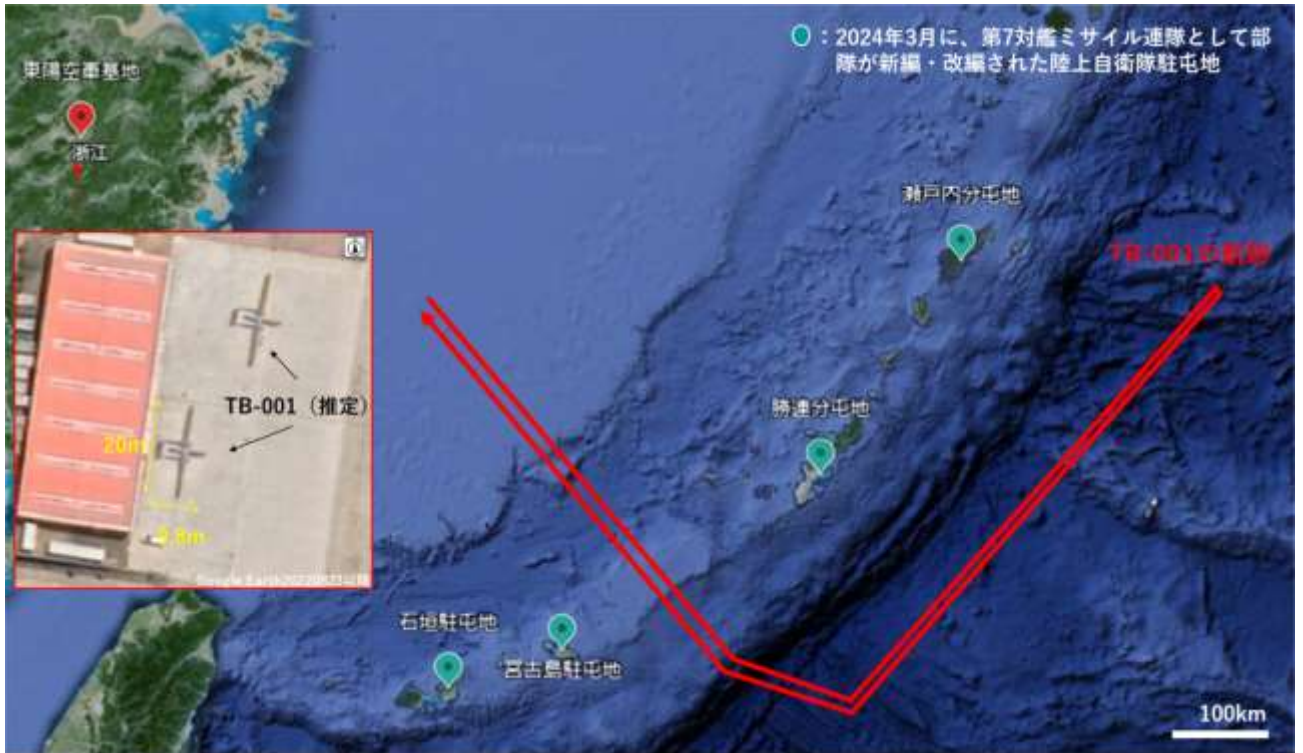
	TB-001	TB-001A
最大離陸重量 (km)	2,800	3,250
最大航続距離 (km)	6,000	8,000
最大飛行時間 (h)	35	40
最大速度 (km/h)	300	380
運用高度 (m)	8,000	10,000



展示中の TB-001（資料源：四川騰盾科创股份有限公司 HP）

下図は TB-001 の航跡を Google Earth 上にプロットしたものである。

航跡から、TB-001 は空軍の無人機連隊が所在する東陽基地から飛来した可能性がある。



TB-001 を対領空侵犯措置で確認したのは 2021 年 8 月 24 日が初であり、今回が 6 回目。過去の主な航跡は下図の通り。



当初は東シナ海上空のみの飛行であったが、年々日本及び台湾周辺での活動を拡大させてきた。特に、今回の飛行ルートは、台湾ではなく日本南西諸島に焦点を当てたものである。

緑でプロットした陸上自衛隊駐屯地・分屯地には 2024 年 3 月に第 7 地对艦ミサイル連隊隷下の地对艦ミサイル中隊が新編・改編され、12 式地对艦誘導弾 (射程約 200 km) を配備している。

中国にとっては、第一列島線における対艦戦闘の脅威となる配置であり、南西諸島の自衛隊配備に対する偵察・牽制を強化している可能性がある。

○ WZ-7 の飛来

6月25日(火)午後、中国軍の偵察型無人機(WZ-7)1機が大陸方面から飛来し、東シナ海上で旋回し、奄美大島北西沖の海上まで飛行、その後、反転・北進し、再度東シナ海上で旋回した後、大陸方面に向けて北西進したことを確認した¹³。



(資料源：統合幕僚監部 HP20240625)

【コメント】

WZ-7は中国空軍に装備されている高高度無人偵察機。公式の諸元は確認できなかったが、2021年9月の珠海エアショーに出展、その後の中国メディアによると、全長約14.33m、翼幅24.86m、最高巡航速度750km/h、航続時間10時間との報道が一般的であり、運用速度を考慮すれば、航続距離は約6000~7000kmの可能性がある。



防衛省が対領空侵犯措置においてWZ-7を初確認したのは、2023年1月1日で今回で4回目の確認発表。同機は25日、韓国の防空識別圏を越えて済州島付近を飛行したと報道¹⁴されており、奄美方面及び27~29日の日米韓共同訓練「フリーダム・エッジ」関連の情報収集を実施していた可能性がある。

(3) 対日認知戦（解放軍報、国防部の発表からの抜粋のみ）

- [日本が外交の軍事化を加速させ、地域の安全・安定を威嚇](#) 軍事科学院 解放軍報 20240607¹⁵
日本外交の軍事化が止まらない。日米同盟の強化、英豪との円滑化協定、NATO・AUKUS・ファイブアイズとの関係強化、日米韓・フィリピン（以下、比）との協力等、日本外交の軍事化はアジア太平洋地域に負の影響を及ぼし、現有の矛盾を激化させ、緊張を高め、直接的な対立を生起させる。

- [海上自衛隊艦艇がスターリンク運用開始](#) 解放軍報 20240620¹⁶
スターリンク運用開始は、米軍の作戦システムへの融合を企図しており、日米軍事一体化につながる。

- [米国が日本の軍事的野心を容認するのを警戒](#) 解放軍報 20240620¹⁷
先日、「日米防衛産業協力・取得・維持整備定期協議」の初会合が開催された。日本は軍事大国を夢見、米は日本をアジアの橋頭保として利用しようとしており、国際社会は警戒が必要だ。

【コメント】

日本関連の記事に関しては3件確認され、5月の4件と大きく変化はなかった。内容も、日米同盟強化を強く牽制する姿勢には変化なく、6月には日米韓共同訓練「フリーダム・エッジ」の実施されたことから、日米韓連携にも反発の姿勢を見せた。

5 国境地域等での活動

(1) 南シナ海

○ セカンドトーマス礁

6月17日、中国海警局は「17日に比補給船1隻が仁愛礁（筆者注：セカンドトーマス礁の中国名）隣接海域に不法に侵入。0559（筆者注：中国時間）、補給船は中国の度重なる警告を無視し、正常に航行している中国船舶に故意に危険な接近を行い、接触。責任は完全に比側にある」¹⁸「比補給船1隻、ゴムボート2隻が仁愛礁隣接海域に不法侵入。中国海警は、警告阻止、臨検、強制離隔等の処置を実施」¹⁹と発表。

これに対し比軍広報担当官は「アユンギン礁（筆者注：セカンドトーマス礁の比名）での比の補給活動は完全に比 EEZ 内であり、中国海警局の主張は虚偽である」²⁰と反論。比報道によれば、中国海警が比ゴムボートに乗り込み、少なくとも8人の比海軍人が負傷し、そのうち1名は指を切断する重傷を負った²¹。



比の輸送ボートを臨検する海警隊員

（資料源：環球網 20240619 に追記）



比船舶を強制離脱させる海警船（資料源：環球網 20240619）

【コメント】

セカンドトーマス礁は、比が揚陸艦「シエラマドレ号」を意図的に座礁させ、実効支配している。しかし昨年来、そこに物資を運んでいた比補給船や巡視船に対する中国海警船の妨害が活発化しており、中比の対立が激化していた。

今回、中国は海警船が比船に対し臨検を実施し、強制離脱させたと報道している。

中国海警局は6月15日から施行した「海警機構行政法執行手続規定」257条により、出入国管理違反の嫌疑を受けた外国人を30日、最長60日まで拘留できると規定しており、今回はこの規定が適用された可能性がある。

今後もこの規定を準用し、更に海警の対応が強硬化する可能性もある。

(2) 東シナ海

○ オランダ（以下、蘭）艦艇への中国軍機の接近

6月7日、蘭国防省は、東シナ海を航行中の蘭艦艇に中国軍機が接近したと声明を発表²²。

声明によれば「東シナ海の国際海空域において7日、中国軍戦闘機2機が海軍艦艇トロンプ（HNLMS Tromp）に対して複数回の旋回飛行を行ったほか、パトロール中の艦載ヘリが中国軍機2機とヘリから接近を受け、不安全な状況となる可能性があった。同艦は東シナ海で国連安保理決議に基づく対北朝鮮制裁執行のための多国籍監視任務を遂行していた」と指摘した。

これに対し、6月11日、中国国防部報道官は「7日、トロンプ艦載ヘリは上海以東において権益侵犯・挑発を行ったため、東部戦区が警告、戦闘機等に対応し離脱させた。完全に合法、プロフェッショナルな規範に基づくもので不安全な状況を作したのは蘭であり、中国ではない。蘭は国連任務と詐称し、他国の管轄海空域で武力をひけらかし、緊張を高め、両国の友好関係を損なった。我々は強烈な不満を示し、既に厳正な申し入れを行った」²³と述べた。



HNLMS Tromp （資料源：蘭国防省 HP）

【コメント】

トロンプ艦は5月31日に台湾海峡を南から北へと通過した。2021年に蘭が太平洋地域に艦艇エバーセン（Evertsen）を派遣した際は、台湾海峡の通過しなかったため、中国は今回の通過を蘭の姿勢転換ととらえ、牽制を強めた可能性がある。また台湾側によると、同艦が台湾海峡通過の際、中国ジャンカイIIフリゲート「南通」が中間線の東側（台湾側）で監視を実施した²⁴。昨年までは中国艦艇は中間線西側（中国側）で監視任務を遂行していたが、今年に入りトルコ海軍艦艇通峡時に東側に進出したのが確認され、これで2回目である。台湾海峡を内海化しようとする企図を有している可能性大。

6 軍事外交・共同訓練

○ 「平和の箱舟」医療船による「和諧使命 2024」

6月16日、海軍「平和の箱舟」医療船が「和諧使命 2024」任務執行の為、出港。今後セーシェル、タンザニア、マダガスカル、モザンビーク、南アフリカ、アンゴラ、コンゴ、ガボン、カメルーン、ベナン、モーリタニア、ジブチ、スリランカ 13 か国を訪問し医療を提供、その後仏、ギリシャを訪問する²⁵。



「平和の箱舟」出港式典

(資料源：中国軍網 20240617)

【コメント】

中国軍は「和諧使命」と称し、アフリカや大洋州の国々に海軍医療船による医療提供を実施しており、今回で10回目。

同船は「平和の箱舟」と呼ばれ、約100名の医療関係者が乗船、外科・整形外科・産婦人科・眼科等の診察・手術が可能。これまで45の国や地域に派遣され、延べ29万人以上の診察に当たった。

グローバルサウスの国々への草の根レベルでの中国の影響力強化の手段として活用されている。

またその後の仏・ギリシャへの寄港は独自外交を目指す仏、一带一路の欧州での入口であるギリシャにとの関係強化への寄与を目的としている可能性がある。

○ 中露共同対テロ演習「辺防協力 2024」

6月25日、黒竜江省黒河市黒竜江大橋一帯において中露共同対テロ演習「辺防協力 2024」が実施された。テロ分子の越境活動に対処するため、航空偵察・水上阻止・対岸配備等によりそれぞれの領域内での捕獲を演練した²⁶。

【コメント】

黒竜江大橋は2022年6月に開通した中露国境を結ぶ初の道路橋。中露協力強化の確認を目的とした可能性があるものの、日米への牽制を目的とした他の共同演習と比較して中国国内での報道ぶりは低調であった。

【参考文献】

資料源は以下の通り。

なお資料源の記述がないものは、筆者の分析により可能性有と評価したものである。

- 1 国防時報 20240621
<https://weibo.com/2184024913>
- 2 中央通訊社 20240619
<https://www.cna.com.tw/news/aipl/202406190082.aspx>
- 3 SIPRI Yearbook 2024
<https://www.sipri.org/yearbook/2024>
- 4 中時新聞網 20240625
https://www.chinatimes.com/realtimenews/20240625001609-260407?ctrack=pc_main_headl_p01&chdtv
- 5 中国海警局 20240625
https://www.ccg.gov.cn/hjyw/202406/t20240625_2323.html
- 6 中華民國國防部- 20240608
<https://www.mnd.gov.tw/Publish.aspx?p=83085&title=%e5%9c%8b%e9%98%b2%e6%b6%88%e6%81%af&SelectStyle=%e6%96%b0%e8%81%9e%e7%a8%bf>
- 7 明報 20240610
<https://news.mingpao.com/pns/>
- 8 中国海警局 20240607
https://www.ccg.gov.cn/wqzf/202406/t20240607_2290.html
- 9 中国海警局 20240624
https://www.ccg.gov.cn/wqzf/202406/t20240624_2320.html
- 10 統合幕僚監部 HP20240627
https://www.mod.go.jp/js/pdf/2024/p20240627_01.pdf
- 11 統合幕僚幹部 HP20240604
https://www.mod.go.jp/js/pdf/2024/p20240604_01.pdf
- 12 四川騰盾科创股份有限公司 HP
<https://www.tengden.com/product/1.html>
- 13 統合幕僚監部 HP20240625
https://www.mod.go.jp/js/pdf/2024/p20240625_01.pdf
- 14 ハンギョレ新聞 20240628
<https://japan.hani.co.kr/arti/politics/50451.html>
- 15 解放軍報 20240607
http://www.81.cn/szb_223187/szbxq/index.html?paperName=jfjb&paperDate=2024-06-07&paperNumber=04&articleid=932788
- 16・17 解放軍報 20240620

<https://rmt-static-publish.81.cn/file/20240620/b7c9b923e213f1e9d8df924d363a7551.pdf>

- 18 中国海警局 20240617
https://www.ccg.gov.cn/wqzf/202406/t20240617_2306.html
- 19 中国海警局 20240617
https://www.ccg.gov.cn/wqzf/202406/t20240617_2310.html
- 20 Philippine News Agency20240617
<https://www.pna.gov.ph/articles/1227060>
- 21 中国时报 20240619
https://www.chinatimes.com/realtimenews/20240619001238-260408?ctrack=pc_armament_headl_p01&chdtv
- 22 蘭国防省 HP20240607
<https://english.defensie.nl/latest/news/2024/06/07/warship-approached-by-chinese-helicopter-and-fighter-jets>
- 23 国防部網 20240611
<http://www.mod.gov.cn/gfbw/qwfb/16315146.html>
- 24 自由時報 20240614
<https://def.ltn.com.tw/article/breakingnews/4705016>
- 25 中国軍網 20240617
http://www.81.cn/yw_208727/16316247.html
- 26 中国軍網 20240702
http://www.81.cn/szb_223187/szbxq/index.html?paperName=jfjb&paperDate=2024-07-02&paperNumber=04&articleid=934381

中国軍事動向月報 2024年6月

2024年7月3日発行

公益財団法人国家基本問題研究所

〒102-0093

東京都千代田区平河町2-6-1
平河町ビル5階

本書の無断転載、複写、複製を禁じます。